國學院大學学術情報リポジトリ

論説 資本の異質性と資本構造：オーストリア資本理論の一考察

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-07
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 赤塚, 一範
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001671

國學院大學経済学研究　第49輯

〈論　説〉

資本の異質性と資本構造
～オーストリア資本理論の一考察～[1]

赤　塚　一　範

目　次

はじめに…… 2
1　オーストリア学派経済学のビジョン…… 4
　1-1　オーストリア資本理論の重要性 …… 4
　1-2　自生的秩序アプローチ …… 7
　1-3　オーストリア資本理論の歴史 …… 9
2　ラックマン『資本とその構造』……12
　2-1　資本の異質性と構造 ……12
　2-2　資本構造のミクロ分析 ……14
　2-3　資本構造のマクロ分析 ……20
3　自動車産業の資本構造……23
　3-1　資本構造のミクロ分析 ……24
　3-2　資本構造のマクロ分析 ……27

---

[1] まず、匿名の査読者から貴重なアドバイスをいただいたことについて謝辞を表したい。その中で、本稿の副題に関して、「オーストリア資本理論」ではなく「ラックマンの資本理論」とすべきではないかとご指摘いただいた。本稿ではラックマンの理論を中心にオーストリア資本理論を論じているが、それはその中に「資本の異質性」と異質な資本からなる「資本構造」というオーストリア資本理論のエッセンスが凝縮されているからである。また、特定の人物の理論が学派を代表することは、オーストリア学派経済学において独自性を持つ他の分野でも当てはまる。例えば、「ミーゼス＝ハイエク景気循環論」は、「オーストリア学派景気循環論」として認知されている。以上の理由により、「オーストリア資本理論の一考察」を本稿の副題とした。

おわりに……33

キーワード　オーストリア学派経済学　資本理論　資本の異質性
資本構造　ラックマン

【要　旨】

本論文では、オーストリア学派経済学を独自の理論としている「資本理論」についてルードウィッヒ・ラックマンの『資本とその構造』を基に説明した。まず、資本理論の方法論的特徴として、それが市場プロセス論等と同じく、「方法論的個人主義」、「主観主義」の立場からのものであること、そして「自生的秩序論」の観点から構築されていることを明らかにした。オーストリア学派の資本理論の要点は、資本の異質性と資本構造にある。オーストリア資本理論は、生産を組織する企業家が理解する資本財の異質性、異質な資本財間の補完関係、その補完関係から必要とされる資本財の組み合わせ、そしてそれら企業家が資本財を組み合わせて構築する資本結合体が、市場関係を通じて自生的な秩序としてのマクロ的な資本構造を作り上げていることを説明し、その変容のプロセスを明らかにする。こうした独自の資本理論を、自動車産業での生産構造を例として説明した。

はじめに

「資本理論は、これまでずっと（重要であるにも拘わらず）軽視されてきた」[2]。これは、今から50年以上前に著されたオーストリア学派に属する経済学者ルードウィッヒ・モーリツ・ラックマンの代表作『資本とその構造』の一節である[3]。資本を多数の異質な資本財や企業体の複合的な関係である資本構造として捉えることに、オーストリア資本理論の特徴がある。実際、企業の生産現場では、様々な資本財を組み合わせて活用し、企業同士は様々な

[2] Lachmann（1978）p.xiii、括弧内は筆者による。

取引を行っているが、そこには一定の秩序や構造といったものが生じている。オーストリア資本理論は、この様な複雑性をもつ現実を忠実に理論化しようとする試みであり、経済を理解する上で重要な側面を捉えている。しかし、ラックマンが上記のように述べた50年の後においても、オーストリア資本理論の重要性は十分に認識されていない。

この原因として、第一に、資本を同質的なものとみなす他学派の資本理論の支配的影響が、第二に、オーストリア資本理論そのものが複雑かつ難解であったことが挙げられる[4]。資本を同質的なものと見なす資本理論において、資本は単に量的なものとなり、その関係性を数式で簡潔かつ明瞭に表現できる。しかし、現実世界にある複雑な諸関係をそのまま理論化したオーストリア理論は、1-3で示されるようにその形成において学派内においても多様性を持ち、且つ難解なものとなった。同質的資本理論の独自性が明瞭なのに対して、オーストリア資本理論のそれは曖昧であった。そのような曖昧さをHorwitz（2000）は、「資本理論はオーストリア学派経済学を定義しない」と表現した[5]。

本稿では、オーストリア資本理論の独自性が「資本の異質性」「資本構造」の概念にあり、それら独自性の基礎は「主観主義」「方法論的個人主義」の厳密な適用にあることを理論的に明らかにする。そのため、まずオーストリア資本理論を概観しつつ、「異質性」と「資本構造」に関して最も本質的な議論を行っているラックマンの理論を詳細に説明する。そして、自動車産業の具体的事例を用いてオーストリア資本理論を説明する。オーストリア資本理論の特徴は、「異質性」と「構造」を重視することにあるが、これらは現

---

[3] ルードウィッヒ・モーリツ・ラックマン（1906-1990）ドイツで生まれ、ベルリン大学に学ぶ。博士号取得を取得した後、LSE でハイエクの指導を受け、後に南アフリカのウィットウォータースランド大学、ニューヨーク大学で教鞭を取る。1976年６月にバーモント州サウス・ロイヤルトン大学で開催された会議で、イスラエル・カーズナー、マレー・ロスバードと共に公演を行い、オーストリア学派経済学の再生に寄与した。

[4] 例えば、Hayek（1941）など。

実世界の基本的特徴である。このことは、オーストリア資本理論が事例を用いることでより深く理解できることを意味している。このような試みは、オーストリア学派でもあまりされてこなかったことであり新しいものである。

第１節では、まず、オーストリア学派経済学が重視する視点と方法論を紹介する。第２節では、ラックマンの主著『資本とその構造』の要点を説明し、オーストリア資本理論の理論的構造を概観する。第３節では、自動車産業を用いて、オーストリア資本理論が意味するものの理解を深めていく。

1　オーストリア学派経済学のビジョン

1-1　オーストリア資本理論の重要性

「国内設備投資伸び最高」。これは2017年５月27日付『日本経済新聞』朝刊１面に掲載された記事の見出しだ。この見出しが示唆するのは、日本経済の好調さであろう。というのも標準的なマクロ経済学で説明される乗数理論に基づけば、設備投資はその乗数倍の大きさだけ有効需要を増加させるからである。他方、設備投資は供給力を増加させるのであるから、需給ギャップが

---

[5] 日本ではオーストリア資本理論の曖昧さおよび難解さを論じる以前に、その知名度、関心が低いことが問題である。例えば、石塚（1993）、小畑（2011）らによってオーストリア資本理論は紹介されているが、その大部分はハイエク、ヒックスの時代までのものである。また現代オーストリア資本理論を代表する Skousen（1990）、Lewin（1999）、Garrison（2001）などの著作は翻訳されておらず、翻訳本の中にはあえて資本理論の部分だけ削られたものもある。例えば O'Driscoll and Rizzo（1985）の日本語訳である『無知と時間の経済学』（橋本、井上、橋本（千）訳）では、原著の第８章としてロジャー・ギャリソンが寄稿した "A Subject Theory of a Capital-using Economy" と題された論文は、翻訳に際して省略されてしまっている。これらの事実は、日本におけるオーストリア資本理論への無関心を示している。同様に、現代オーストリア資本理論の基礎となっているラックマンの資本理論の認知も低く、『資本とその構造』の書評（岡崎（1957））と小畑（2011）による若干の考察が存在する程度である。日本のラックマン研究は、浜田（1997）、原谷（2004）など、主観主義に着目したものが多い。しかし、彼の主観主義は、「企業家的視点」を意味し、その基礎には資本理論が存在している点において、資本理論は主観主義の分析と共に重要である。

拡大することなく成長できるかが問題となる。

しかし、こうした標準的なマクロ経済学が見落としているものがある。それは経済の「質」的変化である。標準的なマクロ経済学では、設備投資（つまり資本量の増加分）を「同質的」な貨幣的集計量として捉える。投資が「量」的な観点からのみ理解され、それが引き起こす「質」的な変化が見られていない。しかし、後者が経済の理解にとって重要ではないとは言えないだろう。例えば、好況時においても、すべての企業が同じように成長する訳ではないし、倒産する企業も存在する。日本の GDP はこの20年ほど500兆円前後で一定しているが、だからといって20年間、全く同じものを同じ企業が生産しているわけではない。このような現象は、すべて「質」的な観点でのみ理解できる。

ここで、標準的マクロ経済理論の基礎を形成しているケインズ理論と新古典派理論の特徴を簡単に説明し、それらでは資本構造を認識できないことを指摘しよう。

ケインズ理論の問題は、資本の増加を単なる有効需要の増加とみなしてしまう点にある。ケインズ理論は、要約すれば消費支出、投資支出、政府支出の合計である有効需要の大きさがその経済の規模を決めるという理論であり、経済の需要面を重視する。資本の増加は、設備投資の増加を意味し、乗数効果を通じ設備投資の乗数倍、経済の規模を拡大させる。しかし、設備投資は本来、生産の拡大を目的として行われるものであり、短期的な需要の変化のみを捉えるケインズ理論には資本理論が欠落している。

他方、新古典派理論は生産面を重視する理論であり、特に成長理論においてその資本理論の存在が知られている。新古典派理論では、貯蓄の増加は利子率の低下を引き起こし、設備投資の拡大を可能にする。設備投資の増加は、生産関数 $Y=F(K, L)$ に従って、生産を拡大させる。資本の増加は資本の限界生産性と利子率が等しくなるまで続き、技術など環境の変化がない限り、定常状態を維持する。

資本理論のないケインズ理論とは異なり、新古典派理論には上記のような

資本理論が存在している。新古典派とオーストリア学派の違いは何か。ラックマンは、フリードリッヒ・ハイエクを代表とするオーストリア資本理論（Theory of Capital）とロバート・ソローを代表とする新古典派資本理論（Capital Theory）とを区別した[6]。新古典派理論では、現実世界では異質な資本財の集合体である設備投資を貨幣価値によって集計し、同質的な資本Kとして扱う。溶鉱炉であろうがコンピューターであろうが、それらは貨幣価値によって集計される。しかし、このような同質的資本の問題点は、無数にある資本財の相対価格が一定である均衡状態においてのみ妥当することだ。均衡はすべての資本財の相対価格の安定を意味するが、このような理論では、経済の「質」的変化を見ることができない。

一方、経済の「質」的変化を見ることができる理論がオーストリア資本理論である。そこで重視されるのは①資本の異質性、②資本構造、③調整プロセスだ。米とパン、魚が異なるように消費財は異質である。同様にプレス機と溶鉱炉が異なるように資本財は異質である。これが、現実の世界の特徴である。そして、異質であるがために、それらの間には組み合わせ、構造が生じる。さらに、現実の世界では、消費者のニーズや技術など世界を構成するあらゆる条件は変化し続けている。例えば、消費者のニーズの変化に対応できない企業、新技術の導入に遅れてしまい競合する他社よりもコストが高くなってしまった企業など、変化に対応できない企業は倒産するか事業規模を縮小しなければならないが、これらは調整プロセスの一側面である[7]。

オーストリア資本理論は、このような異質な資本財の組み合わせによって生じる資本構造の形成、そして変化のプロセスを説明する。そして、それは「主観主義」と「方法論的個人主義」を基礎とした「自生的秩序アプローチ」という独自の方法論を採用することによってのみ可能となる。次項では、こ

---

[6] Lachmann（1978）p.xii

[7] ここでは、ニーズや技術など環境の変化に対応するという企業家の受動的な側面を中心に論じているが、新しいニーズを創造するという企業家の積極的な側面も存在する。

の「自生的秩序アプローチ」を説明する。

1-2　自生的秩序アプローチ

本稿では複雑な資本構造を分析するが、そのための方法論がオーストリア学派経済学者の中に位置づけられるフリードリッヒ・ハイエクが採用した自生的秩序（spontaneous order）アプローチであり、ハイエクの下で学びオーストリア資本理論を発展させたルードウィッヒ・ラックマンが採用した形態論（a morphological theory）的アプローチである[8]。ハイエクは、『資本の純粋理論』において資本理論の研究を進める中で、やがて社会制度や社会そのものへと研究領域を移行させていき、自生的秩序概念を確立した。他方、ラックマンはハイエクの下で経済理論を学び、ハイエクが社会そのものへと関心を移した後も資本理論研究を重ね「形態論的アプローチ」へとたどり着いた。これら二つのアプローチは、名称こそ異なっているが本質的に同じものである。

その共通点は、どちらも「主観主義」と「方法論的個人主義」を基礎におき、「様々な諸要素が密接に関係しあっている複雑な事象」の分析を行っていることにある。形態論的アプローチという言葉は、標準的経済学およびオーストリア学派経済学において、一般的に知られていない。そのため、ここでは、自生的秩序アプローチとして論じる。

社会科学においては、「主観主義」が基礎とならざるを得ない。ハイエク

---

[8] ラックマンは主著『資本とその構造』の中で、形態論的なアプローチを用いて資本構造を説明した。形態学とは、生物や言語の形や構造を分析するための学問である。生物学において、形態学は様々な生物の特徴を捉え分類し、人体を分析する医学においては肉体的構造機能を分析した。言語学では、語や語形成を理解するために形態学が使われた。形態学の特徴として重要なのはそれが単にその形態の特徴や機能を分類するということだけでなく、なぜその形態が導かれたかという歴史的な過程までもその領域に含まれるからだ。資本構造を分析することで形態学的アプローチを採用することで、今ある経済構造の形成過程や、変化する世界における資本構造の変化の過程を分析することができる。

によれば、社会科学の分析方法は自然科学におけるそれと決定的に異なる。なぜならば、自然科学で扱われるデータは客観的なものであるのに対し、社会科学で扱われるデータは主観的なものであるからだ。社会科学において、「事物とは行動する人びとが事物と思うもの」[9]なのである。ハイエクが、経済学における重要な進歩はすべて主観主義の一貫した適用である、と論じているように、社会にある秩序、構造の性質を分析しようとすれば、それら社会秩序全体を構成する個人の主観性を無視することはできない。

さらに、自然科学が対象を分析的な方法で研究するのに対し、社会は合成的な手法によって分析されなければならない。これが、「方法論的個人主義」である。社会秩序は、一人の人間によって作られるものではなく、無数の人間の行動の相互作用によって構築される。従って、経済全体の分析は個人の分析とその統合によってなされなければならない。

このような、「主観主義」と「方法論的個人主義」に支えられた複雑な社会秩序の分析方法が「自生的秩序アプローチ」である。ハイエクは、自生的秩序を「多くの人の行為の所産ではあるが人間的設計の結果ではない秩序だった構造」[10]と定義した[11]。自生的とは、秩序の現れ方を意味しており、外生的につまり外部から強制的にその様態が付与されることによって生じる秩序と区別される。外生的に与えられる秩序の代表例は軍隊、企業など「組織」であるが、それらの秩序はその組織の統率者の指示・命令によって形成される。一方、自生的秩序は、特定のルールの下で、各個人がそれぞれの目的を追求する中に、自然に調整が行われ発生する秩序である。

ハイエクは、自生的秩序を、経済だけでなく、法、文化、制度など様々な領域に見出した。現在では、自生的秩序は後者の観点から論じられることが多い[12]。しかし、ハイエクが自生的秩序概念を発達させた基礎には市場秩序

---

[9] ハイエク（2011b）
[10] ハイエク（2007）p.52
[11] 自生的秩序概念の歴史については Barry（1982）を見よ。
[12] 嶋津（1985）、山中（2007）など。

（カタラクシー）への理解があったこと、そして資本構造もその市場秩序の一形態であることを忘れてはならない。ハイエクは、経済計算論争や資本理論研究を通して、市場秩序の理解を深め、それを社会全般の理論へと発展させた[13]。ラックマンは構造を「一貫したパターンを示す相互関係の複合体」と定義する[14]。これは、ハイエクの自生的秩序概念と矛盾するものではない。ハイエクは複雑な社会全体を、ラックマンは無数の異質な資本財によって構成される複雑な資本構造を分析の対象とした[15]。

このように、オーストリア資本理論は、自生的秩序に沿って理解されるべきである。自生的秩序を理解することで、企業家の主観的行動と市場による調整プロセスを経て構築される複雑な構造の性質を理解することができる。次項では、オーストリア資本理論の歴史を概観し、ラックマンの資本理論を理解するための、基礎知識を提供する。

1-3　オーストリア資本理論の歴史

オーストリア資本理論は、同学派の創始者であるカール・メンガー以来の伝統に基づいている。メンガーは、『国民経済原理』（1871）において異質な無数の生産段階を用いて生産を表現した。ベーム＝バヴェルクは、『資本と利子』（1884）、『資本の積極理論』（1889）などで、メンガーのアイディアをオーストリア資本理論へと発展させた。ルードウィッ・ミーゼスは、『貨幣及び流通手段の理論』（1912）で、ベームの資本理論を景気循環理論に組み込みオーストリア景気循環理論の基礎を構築した。さらにミーゼスは、『ヒューマン・アクション』（1949）において、会計に基づいた資本概念を提

---

[13] Boettke（2002）、Cohen（2003）

[14] Lachmann（1978）p.59

[15] アダム・スミスも、市場を「見えざる手」と表現することで自生的秩序を例示した。しかし、スミスは生産理論を構築する際、労働価値説を採用することによって、生産面においても自生的な秩序が生じていることを見逃した。この生産面における自生的秩序を説明するものが、オーストリア資本理論であり資本構造である。

示している。ミーゼスのオーストリア資本理論を基礎とした景気循環理論は、ハイエクの『貨幣理論と景気循環論』（1929）及び『価格と生産』（1931）で発展させられ世界的に知られることとなる[16]。さらに、ハイエクは、『資本の純粋理論』（1941）でより詳細な資本理論の構築を試みた。その後、ハイエクが理論経済学から政治哲学や社会思想へと関心を移す中、ラックマンはハイエクの資本理論を引き継ぎ『資本とその構造』（1956）を発表した[17]。イスラエル・カーズナーは、『資本についての小論』（1966）で資本理論に関して独自の見解を明らかにした。近年では、マーク・スカウソンの『生産の構造』（1990）、ピーター・ルーインの『不均衡にある資本』（1999）、ロジャー・ギャリソンの『時間と貨幣』（2001）等によってオーストリア資本理論の研究が進められている。

このように、オーストリア学派経済学にとって、資本理論は長い伝統を持ち、大切に引き継がれてきた。しかし、その進歩は直線的なものではない。メンガーに始まる資本理論は、あるときには分岐し、またあるときには逆戻りするなど複雑な様相を呈しながら進歩した。このことを示す研究として、例えばEndres and Harper（2011）、Braun（2015）がある。Endres and Harper（2011）は、資本理論におけるオーストリア学派内の多様性を体系的に説明し、異質な資本財で構成される資本構造を重視するメンガー・ラックマンの流れとそれと相反するベーム＝バヴェルク・ヴィーザーの流れの二つが存在することを指摘した。一方、Braun（2015）は、メンガーは後年の研究（Menger（1888））で、異質な資本財で構成される資本構造を重視する見解を否定し同質的会計資本を重視する見解へと転向した、と指摘した。このようにオーストリア資本理論は多様性をもっている[18]。

---

[16] 同時代のオーストリア資本理論を基礎として景気循環論を構築する試みとして、Strigl（1934）がある。赤塚（2017）はStriglの資本理論を詳細に分析した。

[17] ハイエクとラックマンの関係は、Lewin（2014）を見よ。

[18] オーストリア資本理論の形成史、及びその多様性の詳細に関しては本稿では省略するが、さらなる研究が必要である。

とはいえ、それぞれの理論がばらばらに存在するわけではなく、共通する部分を持っている。それが「資本の異質性」と「資本構造」である。そして、その特徴を最も重視したのがラックマンであり、彼の代表作である『資本とその構造』だ。そのため、現在では、ラックマンの資本理論がオーストリア学派を代表する理論と見なされている。例えば、ピーター・ベッキ編集による『現代オーストリア学派経済学入門』の中では、オーストリア資本理論を紹介する際、ラックマンの理論を中心に紹介されている[19]。このように資本の異質性とその構造を重視する姿勢は、程度の差こそあれオーストリア資本理論の特徴である[20]。

そして、ラックマンは、オーストリア資本理論のエッセンスを以下のように表現した。

資本の異質性は、使用に関しての異質性を意味する
使用に関しての異質性は、複合的な特殊性を伴う
複合的な特殊性は、補完性を伴う
補完性は、資本結合体を伴い、
資本結合体は、資本構造の要素を形作る[21]

次節で、『資本とその構造』を中心としたオーストリア資本理論の特徴を説明するが、その特徴である「資本の異質性」と「資本構造」の概念も、オーストリア学派の他の領域の独自性と同様に、「主観主義」と「方法論的個人主義」を徹底する中に生じることを明らかにする。

---

[19] Powell（2010）
[20] Horwitz（2000）は、資本理論をオーストリアマクロ経済学のミクロ的基礎とみなしている。
[21] Lachmann（1978）p.12

2　ラックマン『資本とその構造』

2-1　資本の異質性と構造

資本財は、企業家の事業計画に結び付けることによって初めて資本財となる。シューティングゲームのためのコンピューターは消費財だが、図面を描くためのコンピューターは資本財である。このように、資本はその財を使用する者の計画に依存するが、この主観主義の立場から構築された資本理論が「オーストリア資本理論」である。そして、主観主義の徹底が、資本財の「異質性」と「資本構造」の強調へと繋がっていく[22]。

資本とは「物的資材の（異質成分からなる）蓄積」[23]である。この異質性の強調にオーストリア資本理論の特徴がある[24]。資本財の「異質性」は、溶鉱炉とプレス機は異なった財であるという当然のことから明白である。しかし、異質性の起源は単に財の形態が異なっていることだけにあるのではない。ここでは、レゴブロックに例えて、資本財の異質性について簡単に説明する[25]。

異質性の原因が、資本財の物理的形態にあることは明らかであるように見える。赤色の正方形のレゴブロックと青色の長方形のレゴブロックは、物理的に色・形が異なっている。しかし、このような物理的形態にのみ資本財の異質性の原因を求めることは、客観的要因にその原因を帰することに他ならず、古典派が労働時間当たりの労働価値という客観的要因に価値の原因を求

---

[22] 資本の異質性は、経済発展を考える上でも重要である。アダム・スミスは発展の原因を「分業」に、シュンペーターは「新結合」に求めたが、これらも資本の異質性が基礎にある。

[23] Lachmann（1978）p.11

[24] 前節で指摘したように、資本の異質性の強調の程度は、学派の中でも差異がある。例えばベーム＝バヴェルクは、資本を「中間生産物の総体」や「さらなる生産のための生産物の複合体」と定義した。彼は、定義から明らかなように資本の異質性を認識していたが、「平均生産期間」を採用し時間という単位で資本蓄積を表すことで、異質性とその構造の重視を貫かなかった。（Lachmann（1978）p.73）

[25] 同質的資本はパテ（粘土）として例えられる。

めたことと等しい。異質性の起源はそのような客観的なものの中にはなく、主観的な要因にこそ存在する。資本財は、企業家がその資本財をどう使うかという計画の中において、「機能」を付与され、「異質性」を持つ[26]。このように、異質性は、企業家の計画の中で資本財を使用する（heterogeneity in use）ことによって生じる。

例えば、同じ赤い色をした正方形のレゴブロックであっても、計画によって果たしうる機能は異なる。赤色の正方形のレゴブロックは、お城の柱になるかもしれないし、砲台になるかもしれない。ハンマーは、岩を砕く、釘を打つ、金属を伸ばすなど様々な用途に使用できる。このように、資本財の機能は、企業家が資本財の用途を考え付く限り、複数存在する。全く同じ資本財であっても、計画によって異なる機能を果たす。これを、資本財の「複合的特殊性（multiple specificity）」と呼ぶ。「機能」とは特定の事に役立つこと、すなわち「特殊性」である。資本財は、特定の「機能」を果たすが故に「特殊性」を持ち、「特殊性」を持つが故に「異質」である。

このように「異質性」の原因は、企業家の「計画」によって「機能（特殊性）」が付与されることにあるが、特殊性をもつ資本財は組わせてある目的のために使用される。これが資本財の「補完性（complementarity）」である。ブロックで遊ぶ子供の最終目的は、赤いタイヤのついた正方形のレゴブロックそのものではなく、車を作ることである。車を作るためには、タイヤのブロックだけでなく、長方形、正方形、窓のついたブロックなど、多様なブロックを組み合わせなければならない。これは、資本財が組み合わされて初めて機能を発揮できるということを意味している。このように資本財は、お互いを補完し合うことで機能するが、この資本財の組み合わせが、資本結合体（capital combination）である。

---

[26] しかしながら、現実において資本財の物理的性質も重要である。巨大な溶鉱炉を僅か10平方メートルの敷地に設置することはできないだろう。企業家は、資本財の物理的性質も考慮に入れながら自身の事業計画を構築する。

補完性は、計画の中で資本財を組み合わせることによって付与される。それでは、「代替性」はどのように考えるべきだろうか。補完関係は、計画の中に生じるが、代替関係は計画を作成する中で、もしくは計画の修正に際して生じる。この意味で、「補完性」は静態的概念であり、「代替性」は動態的概念である。

企業家は、資本財に様々な機能、補完関係を見出すが、彼の目的に最もかなった財の組み合わせを選択する。まず、このような計画策定の際に代替性が生じる。そして、企業家は、選択した計画に従って、資本結合体を構築するが、この時点ではまだ代替性の問題は生じない。しかし、計画に綻びが生じたことが発覚するや否や、再び代替性の問題が生じる。資本結合体は、その一部分を他の資本財で置き換えなければならないかもしれない。このように、補完性は、完成した計画を実行し資本結合体を構築する中で生じる概念であるのに対し、代替性は、計画の策定、修正の中に生じる概念である。新古典派は、代替性、補完性の関係を事前に決められたデータとして扱った。A 財と B 財が代替関係もしくは補完関係にあるかどうかは、所与の条件に依存する。しかし、オーストリア学派において「代替性」「補完性」の概念は、企業家の計画と調整プロセスの中で論じられなければならない。

本項では、資本は「異質性」を持ち、異質な資本財を組み合わせて「資本結合体」が構築されるが、その基礎には企業家の計画という「主観性」があることを明らかにした。資本財は計画の中で、機能を付与され、補完的となる。この「主観性」の徹底こそオーストリア資本理論の特徴である。次項では、さらに資本のミクロ分析を掘り下げ、計画の策定、資本結合体の構築、及びその改定といった一連のプロセスを説明し、ラックマンが最終目的とした経済全体の資本構造を分析するためのミクロ的基礎を提供する。

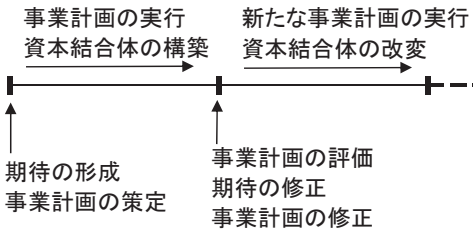
2-2　資本構造のミクロ分析　―企業家が作り上げる資本結合体―

ここでは、企業単位でのミクロ的な資本構造（資本結合体）の分析を行う。企業家は、それぞれ独自の資本結合体を構築する。トヨタの資本結合体と日

産のそれは異なる。本項では、資本結合体の構築、及びその改定というプロセスの分析を行う。

そのプロセスとは、「期待の形成」「事業計画の策定」「資本結合体の構築」「事業計画の評価」「期待の修正」「事業計画の修正」「資本結合体の改変」である。図表１はこれらを時間に沿って並べたものである。これらのプロセスを繰り返すことで、企業家は自らの事業を他の企業家および消費者の諸計画とより整合的なものへと変化させていく。

図表１



Lachmann（1978）より筆者作成

期待の形成

期待とは、事業活動を行うために必要とされる将来の環境予測であり、企業家はこれを基礎として事業計画を策定する。事業計画を策定する上で最も重要なものが、将来の原材料価格、賃金価格、為替レート、生産物価格など価格に関する期待である。

期待は、主観的なものであり異質性を持つ。ラックマンが、期待（expectations）を複数形で表現したことからも分かるように、企業家一人一人は異なった期待を形成する。リンゴ価格の10％の上昇により、ある人は将来におけるリンゴ価格の値上がりを、ある人は値下がりを予想する。このように期待が一人一人異なるのは、過去や現在の状況の解釈に違いがあるからだ。ラックマンは、これを「解釈の主観主義」（subjectivism of interpretation）[27]と呼ぶ。このように個人が異なる期待を持つことは、それ

らに基づいて構築される諸々の事業計画のすべてが実行可能ではないことを意味する。

事業計画の策定

事業計画は、企業家の期待に基づいて特定の目標のために構築される資本財の補完関係そのものであり、それは目的とその達成手段である資本財の組み合わせの様態によって特徴づけられる[28]。このように資本結合体は、まず企業家の計画の中において出現するが、ラックマンは特定の計画の枠組みの中にある補完性を計画補完性（plan complementarity）と呼んだ[29]。

また、生産は時間の中で行われるため、計画は時間的な次元を含んだものとなる。瞬間的に資本結合体が現れ生産が行われるわけではない。固定資本財の購入と配置、原材料や半製品などの流動資本の購入、生産物の販売と現金の蓄積といったプロセスを経て資本結合体は構築されるため、それらの順序も計画の要素に含まれる。

資本結合体の構築

企業家は、このような事業計画に基づいて資本結合体を構築するが、それは貨幣を実体のある生産要素へと転換していくプロセスの中に現れる。ラックマンは資本結合体の構築に必要な資産を稼働資産（operating assets）と呼ぶ。

稼働資産は、貨幣を具体的生産要素へと転換するタイミング及び財の性質によって以下のように第１ライン資産、第２ライン資産、準備資産の３つに分類できる[30]。まず、第１ライン資産は、工場や機械など固定資本財で構成

---

[27] ラックマンは､「解釈の主観主義」と効用理論の基礎となっている「必要の主観主義」（subjectivism of want）とを区別した。（Lachmann（1978）p.21）
[28] Lachmann（1978）p.35
[29] Lachmann（1978）p.54
[30] Lachmann（1978）p.90

される。この資産は、生産計画の最初の段階において貨幣資本によって購入されその耐久性から、次期の生産にも引き継がれる。第２ライン資産は、スペアパーツや賃金支払いのための貨幣などであり、これらの資産は、計画の実行途中で利用される。準備資産は現金準備と資本財のストックで構成される。これらの資産は、何か予想外のことが起こった時に使用される資産であり、何も起きなかった場合は次の期にそのまま引き継がれる。

ラックマンが、このように資産を分類した理由は、企業の生産活動を瞬間的な生産関数によってではなく、時間に沿ったプロセスとして説明するためだ。そのため、オーストリア資本理論では「固定資本財」と「現金準備」が特に重視されるが、これは次頁で説明する。

事業計画の評価

事業計画の成否は、最終的に貸借対照表において貨幣単位で表わされる総資産額の増減で示される。企業家は、異質な資本を組み合わせて使用し事業活動を行うが、自らの事業計画が成功しているかを知るためには異質な資本財を単一の貨幣的尺度で示さなければならない[31]。新古典派は、同質的な資本を生産要素として考えた。しかし、オーストリア理論において同質的資本は生産要素そのものではなく、判断の尺度としてのみ利用される。さらに、収入は基本的に貨幣で現れるため事業計画の成否は、第一に現金準備の増減の中に見ることができる。このように、企業家は「総資産額」「現金準備」の増減をもとに、自らの事業計画の成否を判断する。

期待、計画の修正と資本結合体の改変

それぞれの企業家が持つ期待は異なるため、諸々の事業計画はお互いに整合的なものではない。これは、すべての事業計画が成功することはないこと

[31] Lachmann（1978）p.36、43ラックマンの経済理論における会計の重視には、ミーゼスの影響が見受けられる。

を意味する。ある計画は成功し、ある計画は失敗するだろう。企業家は、事後的に分かる期待の正誤、総資産額および現金準備の増減を基に、期待、計画を修正する。しかし、それら期待の正誤、計画の成否の判定は、次に持つべき期待、次に作るべき計画がどのようなものかを教えない。

これらは再び解釈の問題となる。解釈は、企業家ひとりひとりの洞察や知性に依存する。そのため、すぐに期待、計画が一貫したものとなるわけでないが、消費者のニーズの変化、新技術といった新しい知識が市場に供給されなければ、最後にはすべての計画が調整された世界が訪れるだろう。しかし、決して一貫した期待、計画が市場に形成されることはない。なぜならば、市場を取り巻く環境は常に変化しているし、価格メカニズムは完全に機能することはないからだ。そのため、市場の調整は「終わることのないプロセス」[32]となる[33]。

このように、プロセスの中で企業家の資本結合体の構築、改定を分析する際に、重要となる要素が「固定資本財」「現金準備」である[34]。

固定資本財は、その耐久性のために、企業家の計画の範囲を超えて存在することができる。よって、企業家は、市場プロセスの中で、固定資本財の用途の変更、売却を考慮に入れて、事業計画を修正し、資本結合体を改変する。これは、企業家の事業計画が、既存の資本結合体に影響を受けることを意味する。

さらに、現金準備の存在がある。現金準備は計画の成否の判定基準であると共に、あらゆる資本財の代理物である。新古典派のように生産が瞬間的に行われるのであれば、貨幣はヴェールとなり現金を考える必要はない。しか

---

[32] Lachmann（1978）p.23

[33] オーストリア学派には、市場の均衡化傾向を強調するイスラエル・カーズナーと不均衡化傾向を強調するラックマンの二つの流れがある。前者は、諸条件が変化しなければ均衡が訪れるとするのに対し、後者は市場プロセスの内部に不均衡化する力が内包されていると考える。（尾近・橋本（2003））

[34] 固定資本の重視は、ハイエク－ナイト資本論争でも現れている。（Cohen（2003））

し、現実にはそのようなことはなく、あらゆる生産はプロセスの中で行われる。現金は、順を追って、機械、原材料の購入、労働者の雇用などに転換されていく。もし､急激な環境変化により現金が激減すれば､それは企業にとって倒産が近づいたことを意味する。一方、予期せぬ成功は企業に現金の増加をもたらし、それはリスクのない新規投資を行えることを意味する。つまり現金準備はリスク負担の指標でもある。このように、企業家は現金準備の量に常に注意を払わなければならないため、これは生産をプロセスで考えるための重要な概念となる。

ここまでの議論をまとめよう。企業家は、過去の出来事や現在の状況を主観的に解釈し、期待を形成する。企業家は、その期待を用いて事業計画を策定し、資本結合体を構築していく。実行した計画が成功したかどうかは、現金準備、総資産額の増減で事後的に判定することができる。計画通りであれば、構築した資本結合体を変化させる必要はないが、予期せぬ成功、予期せぬ失敗が起こった時、企業家は期待、事業計画を修正し、資本結合体を改変する。

このような一連のプロセスを分析することにオーストリア資本理論の特徴がある。資本を同質的なものと見る理論では、このようなプロセスを分析する必要はない。なぜならば、あらゆる資本財は、それぞれ完全な代替物となるからだ。そのような均衡状態のみを問題とした理論において、資本は量的な問題のみとなる。一方、資本の異質性を基礎として構築されるオーストリア理論では、それら異質な資本財が計画の中で適切に使われてゆくプロセスが問題となる。企業家は、状況を主観的に解釈し計画を立てるが、それら期待、計画は市場プロセスを通じて徐々にお互いに一貫したものとなる。そして、プロセスを見る際に、重要となるのが、貨幣価値によって示される同質的資本である「総資産額」、そして「固定資本財」「現金準備」である。新古典派において、同質的資本は、生産要素とみなされる。一方、オーストリア学派において、それは企業家の判断の基準としてのみ利用される。固定資本

財は、長期にわたって存在するため、計画を修正する際、企業家は過去に投資し構築した資本結合体に影響される。現金準備は、事業の成否を測る第一の指標であり、リスク負担の基礎であるため、事業計画策定のための重要な要素となる。

このように、オーストリア理論は企業家的視点、つまり「主観主義」に立って構築された理論であり、このことが資本を同質的とみなす理論とは際立って異なる点である。そして主観主義の重視は、カーズナーによる企業家論の発展や、企業論[35]への接近へと繋がってゆく。

2-3　資本構造のマクロ分析　―経済システム全体としての資本構造―

ここまでは、企業家の構築する資本結合体を分析した。資本構造のマクロ分析とは、経済全体において構築される資本構造の形成・性質に関する分析である。ラックマンは、構造という言葉を特にマクロレベルでの「資本構造（the capital structure）」について論じるときに使用している。現実では無数の企業がそれぞれ独自の資本結合体を構築しているが、これらは市場の価格システムという経済全体にわたるネットワークによって、相互に調整され、巨大な資本構造を構築している。本項では、資本構造が市場を通してどのように相互調整されるかを分析する。

「構造とは機能を意味する」[36]。それぞれ独自に作られる資本結合体やそれを形成する資本財が、社会全体の中で、何らかの機能を果たし補完関係を構築している状態、このことをラックマンは構造的補完性（structural complementarity）と呼んだ[37]。企業家は、計画によって資本財に機能と補完性を付与する。これが計画補完性（plan complementarity）であることはすでに説明した。一方、計画補完性の概念を社会全体の資本構造に適用した

[35] 例えば、Foss and Klein（2012）など。
[36] Lachmann（1978）p.53
[37] Lachmann（1978）p.54

ものが、構造的補完性である。つまり、A 社の溶鉱炉と B 社のコピーファックス複合機は、経済全体で見たときに、何らかの補完関係となっている。ラックマンは当初、補完性という言葉を特定の目的のために共同して使われるという意味で使用した。しかし、自由競争市場を基礎とする社会には、社会計画者が意図するような唯一の目的・計画といったものは存在しない。構造的補完性とは、単に「それぞれ両立する様々な目的のために利用される資本財の性質」を示している[38]。つまり、社会にある無数の計画が両立するというハイエク的意味での均衡状態にあるとき、構造補完性は成立する。ラックマンは、構造的補完性が成立する無数の計画がある状態を計画構造（plan structure）と呼ぶ。この計画構造に従って、具体的な資本構造が構築される。

しかし、資本構造は、資本財の物理的構成が一定であることを意味するわけではない。なぜなら、前項で見たように、現実において、資本結合体は常に改変され続けており、資本財の物理的構成が一定となることはないからだ。ラックマンは、資本構造を以下のように定義する。

構造とは一貫したパターンを示す相互関係の複合体である。その相互関係は実体（資本結合体）の間に存在する[39]

ラックマンは資本構造を物理的な資本財の構成ではなく、資本結合体同士の関係性の複合体と見なした。このような資本構造は、資本結合体が変化し続けたとしても、一貫したものとして存在することがありうる。例えば、取引のある企業同士がお互いの資本結合体を変化させたとしても、取引関係を変化させないということはありうるだろう。このように、ラックマンは、資本構造を資本結合体同士の関係性の調和と考えた。ラックマンは、資本構造の調和が維持される資本変化を「調和的資本変化」（consistent capital

[38] Lachmann（1978）p.56
[39] Lachmann（1978）p.59　括弧内は、筆者による。

change）と、調和が維持されない資本変化を「不調和的資本変化」（inconsistent capital change）と呼び区別した[40]。

調和的資本変化が起こるために必要なものが、市場の情報伝達機能の完全性と期待の調和である。ハイエクは、市場の価格メカニズムを情報伝達のシステムとして考えた。ラックマンはこの考えを引き継ぎ、市場による情報伝達を経て、構造的補完性が成立する状態へと近づくと考えた。

しかし、ラックマンにとって、市場の情報伝達機能は完全なものではない。価格を変化させる出来事は同時に起こりうるし、伝達の速度は出来事によって異なる。この場合、価格変化は情報を正しく伝達しない。ここで、価格の変化を解釈するという余地が生まれる。解釈は変化を認識する者の知性と洞察力に依存し、これによって形成される期待は異なったものとなる。このように、市場プロセスは永遠に終わることはない。

結局、現実には「調和的資本変化」（consistent capital change）ではなく「不調和的資本変化」（inconsistent capital change）が起こるだろう。不調和的資本変化は、結局は再調整せざるを得ない資本構造への変化であり、計画の失敗、予期せぬ成功となって現れる。失敗は、資本財不足、資本財の価格上昇、生産物の価格低下などによって、計画の未達、納期の遅れ、収益の減少、損失の発生といった現象を引き起こすだろう。一方、予期せぬ成功は、企業家に予想外の収入をもたらす。

このような市場のメカニズムの不備を補完する制度として、ラックマンは「先物市場」「株式市場」を重視した。これらの市場は、完全ではないとはいえそれぞれの期待を一貫したものとする。例えば、予想外の収益を得た企業の株価は上昇し、人々の期待を一貫したものへと導くだろう。

最後に、簡単にオーストリア資本理論の特徴を検討しよう。本項では、個々の企業家によって独自に作られる資本結合体が市場を通して相互に調整されつつ、経済全体に資本構造が構築されるのを見た。これは、「方法論的個人

---

[40] Lachmann（1978）p.60

主義」を貫くことによってなされるマクロ理論のミクロ基礎付けである。資本を同質的とみなす理論において、ミクロ的基礎付けは、一人当たり生産関数を単純に足し合わせることによってなされる。そこには、市場の調整プロセスは存在しない。それに対して、オーストリア資本理論は、それぞれ異なった解釈をする主観的な個人間の相互調整のプロセスを分析した。

これが意味することの重要性は、オーストリア学派において、マクロ経済理論とみなされている景気循環論を見ることでも理解できる。オーストリア景気循環論は、貯蓄以上の投資が行われることによって景気循環が起こる過剰投資（over-investment）の理論と呼ばれることがあるがこれは間違いだ。正しくは、誤った投資（mal-investment）の理論である[41]。過剰投資は、貨幣単位で合計された投資総額が貯蓄総額以上になることを意味するが、このような量的な観点は新古典派の同質的資本理論に基づいている。異質な資本で構成される資本構造を考えるとき、それは、本来なされるべきでないところになされた投資、誤った投資、として考えなければならない。このように、オーストリア資本理論は、景気循環論といったマクロ現象を理解する上でも欠かせない概念である。

３　自動車産業の資本構造

本節の目的は、オーストリア資本理論を自動車産業の事例を用いて説明することで、これまで抽象的にしか説明されてこなかったオーストリア資本理論の理解をより一層深めることである。従って、本節では同産業における技術的問題や経営的問題を詳細に説明するのではなく、自動車産業において生じているある種の秩序、生産構造のパターンとその変化を概説するに留める。

一般的に、自動車は１台あたり5000種類、２万～３万もの部品によって作られている[42]。これらの多種多様な部品は、様々なプロセスを経て、自動車

[41] Horwitz（2000）p.49
[42] 今田（2016）

へと組み立てられていく。そのプロセスは複雑なものであるがそこには一定の構造・秩序が形作られている[43]。本節ではそのような構造・秩序やその変化をオーストリア資本理論の概念を用いて説明する。

3-1　資本構造のミクロ分析　―自動車産業における資本結合体の構築―

自動車製造では、数多くの異質な資本財、例えば、原材料、半製品、機械、工場といったものを組み合わせて生産が行われている。それら多様な資本財は、事業計画のもと補完的関係で結び付けられ一定の構造を形成している。ラックマンはそれを資本結合体と呼んだ。

自動車産業における資本結合体には、大きく「工場内」「生産拠点内」「企業内」「産業内」の四つのレベルが存在すると言える。

第一の「工場内」レベルでは、工場でのラインレイアウトである。自動車生産では、プレス機、圧延機、組み立てロボット、ベルトコンベアーなど多様な機械類が使われるがそれら機械類は一定のパターンをもって配置される。例えば、エンジン組み立てラインでは、大きく「鋳造･鍛造」「機械加工」「エンジン組立」「検査」という工程があるが、それら工程を進めるために、様々な機械設備が配置させられる。

第二の「生産拠点内」レベルでは、拠点内での建屋レイアウトである。拠点での材料の搬入・搬出のための埠頭・道路・線路などのインフラ、研究所、鋳造工場、鍛造工場、組立工場、試験走行場など、多様なインフラ・建屋同士の配置である。

第三の「企業内」レベルでは、生産拠点のレイアウトである。通常、自動車産業において、一つの企業に一つの生産拠点しかないということはなく、部品加工拠点、エンジン組立拠点、車体組立拠点など様々な拠点がある。こ

---

[43] 藤本（1997）は、トヨタ自動車におけるルーチンの形成と進化を分析しているが、この研究も自生的秩序の一形態としてオーストリア学派的観点から考察することも可能である。

れらの拠点同士の配置や機能を考えるレベルである。

第四の「産業内」レベルは、サプライヤーとの関係である。自動車産業において、自社のみで自動車生産を行うことはできない。自動車企業では、多くの原材料、部品、半製品を複数の企業から購入している。これら企業同士の関係が第四のレベルである。この企業間の関係性は、企業内における資本結合体の構築と異なり、市場を通じた取引において構築されるため、マクロレベルでの分析が必要となる。

これら多様なレベルにおいて存在する資本結合体は、計画に従って、貨幣が物理的設備へと転換させられることで生じる。これら設備は、物理的にある種の規則性をもって配置されているが、その規則性の本質は目に見えない機能での繋がりである。さらに各レベルでの資本結合体の変化は、他レベルでの資本結合体と密接に関係している。例えば、生産拠点内における建物の配置の変更は、特定の工場内の生産ラインの変更を伴うかもしれない。

これら、資本結合体の構築は、事業計画に基づいて構築される。日産自動車の場合を例にとってみよう。日産自動車は、「中期経営計画」という数年単位に渡る事業計画をもとに年ごとに「生産･販売計画」「設備投資計画」「購買計画」「研究開発計画」といったより詳細な計画を作成する。日産ではここ６年間の中期計画である「日産パワー88」を終了し、2017年９月に新たな計画である「アライアンス2022」を提示した。これは、2017年度から６年間の計画であり、主な内容は、①2022年までに完全自動運転車を開発すること、②2022年までに40車種において自動運転技術を搭載すること、③無人運転車両を使う配車サービスに参入すること、である[44]。今後、日産自動車の資本構造体は、この計画に基づいて構築される。

しかし、この計画がうまくいく保証はない。現実が期待と異なったとき、企業家は自らの計画を修正しなければならない。リーマンショックにおける日産自動車の例を挙げよう。当時、日産自動車は、2008年度からの５か年計

[44] 日産自動車ホームページ

画である「日産 GT2012」を掲げていた。これは、積極的な投資活動を伴う計画であり、日産はそれに基づいて資本結合体を構築していた。しかし、2008年９月のリーマンブラザーズ破綻に端を発する金融危機が発生し、景気後退が鮮明となった。日産は、最終的に中期経営計画の修正を余儀なくされ、新たに「日産パワー88」という中期計画を策定した。

この時の計画修正の判断の中心となったのが、現金である。そのことを日産自動車の経営者であるカルロス･ゴーンは、「資金はキング（王様）になった」[45]と表現した。資金確保のために、多くの計画は中断された。それは、設備投資の中止だけでなく、生産の縮小、部品発注の中止、クラブ活動の休部、役員報酬の引き下げ、にわたった。オーストリア資本理論では、資本財の異質性とその組み合わせを重視するとともに、資本財の原資である現金を重視しており、現金準備が事業計画に影響を与えると考えた。リーマンショック時における日産自動車の計画修正は、現金が事業計画に与える影響の大きさを示していると言えよう。

最後に、ここまでの議論をまとめてみよう。オーストリア資本理論では、まず、資本財は異質であるという前提に立ち、企業家はそれらを用いて資本結合体を構築する。その資本結合体は、「期待の形成」「計画の策定」「資本結合体の構築」「事業計画の評価」「期待・計画の修正」「資本結合体の改変」といったプロセスの中で変化していく。そして、計画の修正には、既存の資本結合体や現金の量が重要な要素となることは前節で説明した。本項では、自動車産業においても、多様な資本財が企業家の計画に従って、ある種の資本結合体を構築し、常に改変され続けているのを見た。日産自動車のカルロス・ゴーンは、環境の変化をふまえ自らの事業計画を修正したが、その判断の中心は現金であった。このように、自動車産業におけるいくつかの事例は、オーストリア資本理論である程度説明できるが、それはオーストリア資本理論が現実の世界にいる企業家の視点に立って構築されたからといえるだろ

[45] 日本経済新聞2017年１月20日朝刊

う。

3-2　資本構造のマクロ分析　―自動車産業の資本構造―

ここでは自動車産業におけるマクロレベルでの資本構造に関して分析を行うが、これは市場での企業間取引を通じて自発的に生じる資本結合体の調整プロセスの分析と考えることができる。このマクロ分析は、まず、自動車産業内において生じる資本構造と、自動車産業と他産業との関係性において生じる資本構造の二つに分けることができる。そして自動車産業内における資本構造は、第一に、自動車の最終的な組み立てを行う企業を中心としたサプライチェーン、第二に、競合関係にある同業者間における関係性の二つの観点から分析できる。特に後者は自動車産業の業界再編という形で現れる。さらに自動車産業と他産業との関係性において生じる資本構造は、業界内の再編にとどまらず､自動車産業の資本構造を大きく変える可能性を持っている。これらの関係性はすべて、市場を通して調整される資本構造のマクロ分析と考えることができる。

サプライチェーンの改変

自動車産業において、単独の企業だけで最終生産物である自動車を生産することはできない。原材料メーカー、１次部品メーカー、２次、３次と様々なサプライヤーが自動車生産を支えている。ここでは、市場の価格メカニズムによって、サプライチェーンが変化するという事例を上げよう。

2000年に日産自動車は「日産リバイバルプラン」という中期経営計画を発表した。日産自動車は当時大きな負債を抱えており、改革が急務であった。日産はその計画の中で、系列のサプライヤーを廃止し、海外のメガサプライヤーの利用を進めた。カルロス・ゴーンの「我々のサプライヤーの数は多すぎます。現在1145社の会社から部品、資材を購入していますが、2002年度には600以下にします。また、現在、設備とサービスについては6900社にも及びます。これも2002年度には3400以下にします」[46]という言葉通り、日産の

サプライチェーンは大きく変化した。

このようなサプライヤーの移行の理由は、部品のコストである。日産では1999年頃の購買コストがルノーのそれと比較して20～25%も高かった。ゴーンは、その原因がサプライヤーの数が多すぎることにあると指摘し、それらサプライヤーとの取引を見直すことで購買コストを抑えることに成功した[47]。このように、価格を指標とした市場プロセスを通じて、常にサプライチェーンは調整され続けており、これはオーストリア資本理論の市場による資本構造の調整のプロセスと見ることができる。

ここで、若干の補足が必要である。日本において、これまで多くの場合に資本的・人的関係を伴った長期継続的、かつ信頼関係に基づいた緊密な企業関係、いわゆる「系列取引」という日本独自のサプライヤーシステムが見られた。一方、アメリカでは、複数の生産プロセスを同一企業が行う垂直統合型のシステムが見られた。この違いの背景として次のような指摘がある。かつての日本では自動車産業の発展時に、十分な技術を持ったサプライヤーが存在せず、メーカーも何千もの部品を内生化できるだけの余力をもたなかった。そのため、日本のメーカーはサプライヤーを援助・育成した。それに対して、欧米では技術力のあるサプライヤーがすでに存在しており、メーカーが巨大化する中で、サプライヤーの買収や部品の内生化を行った[48]。このように異なった歴史的背景を持つことで生じたサプライヤーシステムの違いを、オーストリア資本理論ではどのように考えるべきだろうか。

オーストリア資本理論は、資本構造の変化を歴史的なプロセスの中で分析する。なぜなら事業計画の修正は、これまで存在した資本結合体の形態、性質を考慮に入れなければならないからだ。そして、既存の資本結合体の形態、性質の中には、企業の組織形態、文化、これまでのサプライヤーとの信頼関

---

[46] ゴーン、リエス（2003）259頁
[47] ゴーン、リエス（2003）237頁
[48] 下川（2004）60-65頁

係、など様々なものが含まれる。これらの要素は、オーストリア資本理論では十分に説明されていない。しかし､ハイエクが後年の自生的秩序の研究で、法、伝統、文化、といった要素を加えて幅広く社会秩序の分析を行ったこと、そして、ラックマンが後年、制度の研究を行ったことを考えれば、今後は資本理論とそれら諸要素との関連性についてさらなる研究が行われるべきである。そうすることで、日本とアメリカのサプライヤーシステムの違いといった現象をオーストリア学派的観点から、より詳細に理解することが可能となるだろう。

業界再編

業界再編には通常様々な意味が含まれているが、本項においては、自動車産業内における特に同業社の間で生じる競争によって起こる資本構造の変化の事を意味する。

ここで、自動車業界の再編の例として、日産自動車と三菱自動車の提携を見てみよう。日産自動車は、2016年10月20日に2370億円出資、三菱自動車の株式の34％を取得し、三菱自動車をルノー・日産アライアンスの傘下に収めた。この資本提携によって両者は、原材料の共同調達や工場の共用や、インドネシアの工場で組み立てる三菱自動車の多目的車を日産自動車にOEMで供給することを発表した[49]。また、2017年４月には、東南アジアで日産自動車と三菱自動車は物流拠点を統合すると発表し、カルロス・ゴーンは４月26日に早々と三菱自動車が所有するタイの自動車生産工場を視察した[50]。

この資本提携によって起こったことを、オーストリア理論を用いて説明してみよう。カルロス・ゴーンが行ったことは、競合相手であった三菱自動車の資本結合体と日産自動車の資本結合体を協調させるものである。つまり、市場において代替関係にあった資本結合体を資本提携することによって補完

[49] 日本経済新聞2016年10月21日朝刊
[50] 日本経済新聞2017年４月25日朝刊、2017年４月27日朝刊

関係に変え、ある種特別な資本構造体を構築したと言えよう。

さらに、これは、三菱自動車の構築した資本結合体の再利用と見ることもできる。三菱自動車は、日産自動車の資本提携がなければ、倒産もしくは、事業を縮小せざるを得なかったかもしれない。現に、三菱自動車の資産価値を表す株価は、大きく下落していた。この株式を購入することで、日産自動車は、三菱自動車を傘下に収めたが、これはある種の資本結合体の購入ということが言える。ゴーンは自らの計画の中に、価値の下がった資本結合体を組み込み、それらに新たな機能を与えたのだ。

このように、業界再編とは、一種の資本構造の改変ということができるだろう。自身の計画が失敗し、損失を生み出した企業の資本結合体を、別の企業が活用することで、社会全体の補完関係が構築されていく。

ここでも若干の補足をしておく。企業論、経営論等では、企業がどこまでを自社で行うかを決めることを「企業の境界」と呼び、「取引費用理論」など様々な研究が行われてきた。サプライチェーンの改変、提携、買収などは、この問題と関連づけて論じられなければならない。オーストリア資本理論においては、「企業の境界」を決めるのは、第一に企業家の計画であり、第二に市場原理である。なぜなら、計画に従って構築される資本結合体は、基本的に収入が費用を上回らなければ維持できないからだ。そのため、企業家は、価格の変化を注視し、それを解釈する。今後の課題としては、オーストリア資本理論をさらに精致化するために、企業論、経営論とオーストリア理論の関連性について研究を進めていく必要があるだろう。

新たな事業環境の到来

ここでは、自動車産業と他産業との関係において生じる資本構造の変化を論じる。現在、自動車業界に大きな変化が訪れている。それが、「電動化」「デジタル化」「自動運転」といった新技術と、さらに「カーシェア」といった新サービスへのトレンドである。これらの登場で自動車産業の資本構造は、大きく変化するかもしれない。

例えば、「電動化」のトレンドを見てみよう。その要因は、大きく「電池技術の向上」と「各国のCO_2基準など環境規制」にある。これらの変化によって自動車の電動化が加速している。「電動化」によって、一般的に３万点ある部品の４割が減少すると言われている[51]。これは単なる部品数の減少ではなく、産業構造の根本的な変化を引き起こす。これまでの自動車産業は、エンジンや車体など機械部品が中心に構成されており、その部品を中心とした「系列」によって産業構造が構築されてきた。しかし、「電動化」「デジタル化」「自動運転」といった新しい技術の基盤はそういった機械ではなく、半導体などの電子部品やAIなどソフトフェアにある。自動車メーカーは部品調達をこれまでの「系列」ではなく、新しく電子部品やソフトフェアに技術力をもつサプライヤーへと転換を図っている[52]。例えば、トヨタは多くの部品の発注をこれまでの「デンソー」から、ドイツの「Continental」へと移している。また、日産は自身の系列会社の株式の売却を進めている。

さらに、「カーシェア」などサービス企業の台頭が、これまでの自動車メーカーと消費者との関係を変化させる。これは消費者のニーズが、車の所有から車の一時的な利用へと変化してきたことによる。これまで、自動車メーカーは直接消費者と繋がることで、サプライヤーに対して大きな力を持つことができた。しかし、消費者との間に自動車の貸出サービスを提供する企業が入ることで状況は一変する。自動車メーカーは、サービス企業に自動車を提供するサプライヤーとなる。

このような変化をオーストリア理論で説明してみよう。まず、「電動化」「デジタル化」「自動運転」へのシフトの背後には技術の変化があり、「カーシェア」の背後には消費者のニーズの変化があった。これら二つの大きな変化を企業家は機敏に察知し、自らの事業計画を策定し資本結合体を構築する。しかし、今回の変化の特徴は、それが他業種を巻き込むほどの大きさであるこ

---

[51] 部品の変化に関しては総合技研（2017）に詳しい。
[52] 清晌一郎（2016）

とにある。これは、技術やニーズの変化に対して既存の自動車産業では十分対応しきれないということを意味する。オーストリア理論では、事業計画の修正は、既存の資本構造にも影響を受けると説明した。例えば、トヨタ自動車は今回挙げた変化に十分ついていけていないと指摘されている[53]が、それは内燃機関を活用したガソリン車およびハイブリッド車を生産するための資本結合体の延長に自身の事業計画を構築していたためと言えるだろう。これまでトヨタ自動車が構築した内燃機関を中心とした資本結合体には自動運転の AI を開発するだけの資本財および人材が十分でなく、こういった分野に出遅れてしまった。一方、ソフトフェア企業やデジタル企業は、そういったものを開発・生産するだけの資本結合体がすでにあるため、利潤機会を見逃さず､事業拡大のための計画を策定し実行することができる。しかしながら、トヨタ自動車と同じ、内燃機関を生産するための資本結合体を持っていた日産自動車は、トヨタよりも先に電気自動車を販売しているが、このことは事業計画が既存の資本結合体だけでなく、企業家の洞察力、知性といったものにも大きく影響を受けることを示している。

このように、産業間にわたる資本構造の変化も、市場を通しての企業間の競争、取引によって調整され、それは多かれ少なかれ企業家がこれまで構築してきた資本結合体と企業家の洞察力や知性に影響を受ける。このような他業種を巻き込んでの資本構造の変化は、経済全体を一つの情報システムと捉えるならば､「サービス」「IT」「デジタル」産業を含めた経済全体で構造補完性が構築されつつあると見ることができるだろう。

ここでは、技術、及び消費者のニーズという外生的変化に対応してどのように資本構造が変化するかを具体的に見た。このような、外生的変化に対する資本構造の変化はラックマンも十分に議論しなかったことであり、その意味でもこの議論は意義があるだろう。しかし、企業家の積極的、創造的な側面を考慮に入れるならば、このような外生的な変化も本来内生的なものとし

[53]『週刊東洋経済』2017年４月29日－５月６日

て議論することも可能であるがここではそれについて詳しくは論じない[54]。

本項では、まず、価格メカニズムを基礎としたサプライチェーンの改変、及び業界再編を見た。そして、最後に、外生的な変化に対する産業構造の変化を見た。このような構造の変化は、決して同質的資本に基づいた資本理論では見ることができない現象であり、ここにオーストリア資本理論の意義がある。しかしながら、オーストリア学派経済学の理論の中に、企業に関する体系的な理論が不足している。今後、オーストリア資本理論は、企業論的、経営論的観点からも研究されなければならないだろう。それは資本理論においてさらに主観主義を推し進めるということでもある。そのような試みは、経済現象の複雑な諸関係の理論化を試みるオーストリア学派理論にとって意義のあることだろう。

おわりに

経済とは、無数の異なる諸要素から構成される複合的な関係性である。オーストリア資本理論は、この関係をミクロ的には企業家による異質な資本財の組み合わせ（資本結合体）の構築として、マクロ的には市場を通したそれら資本結合体同士の関連性として考えた。ここからわかることは、経済はある種の構造、秩序を持ち、この経済の構造変化を見落としてはならないということだ。資本を同質的なものとしてとらえる資本理論は、このことを完全に見落としてしまう。

本稿では、まず、オーストリア学派経済学のビジョン、方法論を紹介した。オーストリア資本理論は、「主観主義」と「方法論的個人主義」を基礎としており、「自生的秩序」の観点から構築されていた。次に、ラックマンの理論を中心にオーストリア資本理論を詳細に説明した。ラックマンは、企業家

[54] 本稿で論じる企業家は、利潤機会を発見するカーズナー的企業家を中心として論じており、新結合の遂行（イノベーション）によって経済の内部から変化を引き起こすシュンペーター的企業家像ではない。

的視点から、資本財の異質性、及び補完関係が生じることを明らかにし、企業家の活動と市場プロセスによって自生的な秩序として経済全体に資本構造が作り上げられることを説明した。最後に、自動車産業を用いて、オーストリア資本理論を説明した。自動車産業特有の要素は多数あるとはいえ、その産業構造の変化はオーストリア資本理論の理解を深めるものであった。

とはいえ、本文や脚注など様々な個所で指摘したが、オーストリア資本理論に関してさらなる研究が必要な領域は多数ある。例えば、多様性を含んだオーストリア資本理論の形成史に関する研究がある。また、オーストリア資本理論は、オーストリア学派が独自性を持つ他の領域、例えば「景気循環論」「経済計算論」「自生的秩序論」「企業家論」の基礎となっているが、このような領域と資本理論の関係はまだ十分に議論されているとは言い難い。さらに、オーストリア学派は、企業家を重視するにも拘らず、企業理論や経営論との関連性も十分に議論されていない。今後も、このような方向で、オーストリア資本理論の研究がすすめられていくべきであろう。

参考文献一覧

英語文献

Barry, N. P. (1982) “The tradition of spontaneous order” *Literature of Liberty* 5 (2), pp.7-58.

Boettke, P. and Vaughn, K. (2002) “Knight and the Austrians on Capital, and the Problem of Socialism” *History of Political Economy*.

Böhm-Bawerk, E. von. [1884] (1890) *Capital and Interest*, Translated by W. Smart, London: Macmillan.

Böhm-Bawerk, E. von. [1889] (1930) *Positive Theory of Capital*, Translated by W. Smart, New York: G. E. Stechert.

Braun Eduard. (2015) “Carl Menger’s Contribution to Capital Theory,” *History of Economic Ideas*, Vol.23, No.1, pp.77-99.

Cohen, A. J. (2003) “The Hayek/Knight Capital Controversy: The Irrelevance of

Roundaboutness, or Purging Processes in Time?" *History of Political Economy*.

Endres, A. M. and Harper, D. A. (2011) "Carl Menger and his followers in the Austrian tradition on the nature of capital and its structure," *Journal of the History of Economic Thought*, Vol.33, No.3, pp.357-384.

Foss, N. J. and Klein P. G. (2012) *Organizing Entrepreneurial Judgment: A New Approach to the Firm*, New York: Cambridge University Press.

Garrison, R. W. (2001) *Time and Money: The Macroeconomics of Capital Structure*, London: Routledge.

Hayek, F. A. [1929] (1933) *Monetary Theory and Trade* Cycle, London: Jonathan Cape, translated by N. Kaldor and H. M. Croome.（ハイエク F.A.　古賀勝次郎／谷口洋志・佐野晋一・嶋中雄二・川俣雅弘訳（2008a）「貨幣理論と景気循環」『ハイエク全集Ⅰ-1　貨幣理論と景気循環　価格と生産』1-133頁 春秋社）

Hayek, F. A. [1931] (1935) *Prices and Production*, London: Routledge & Kegan Paul（ハイエク F.A.　古賀勝次郎／谷口洋志・佐野晋一・嶋中雄二・川俣雅弘訳（2008b）「価格と生産」『ハイエク全集Ⅰ-1　貨幣理論と景気循環　価格と生産』135-273頁 春秋社）

Hayek, F. A. (1941) *The Pure Theory of Capital*, London: Macmillan（ハイエク F.A.　江頭進訳（2011a）『ハイエク全集Ⅱ-8　資本の純粋理論［Ⅰ］』春秋社）（ハイエク F.A. 江頭進訳（2012）『ハイエク全集Ⅱ-9　資本の純粋理論［Ⅱ］』春秋社）

Hayek, F. A. [1952] (1979) *The Counter-Revolution of Science: Studies on the Abuse of Reason*, Indianapolis: Liberty Fund.（ハイエク F.A. 渡辺幹雄訳（2011b）『ハイエク全集Ⅱ-3　科学による反革命』春秋社）

Hayek, F. A.(1973) Law, *Legislation and Liberty Volume1 Rules and Order*, London: Routledge and Kegan Paul.（ハイエク F.A.　矢島鈞次・水吉俊彦訳（2007）『ハイエク全集Ⅰ-8　法と立法と自由［Ⅰ］』春秋社）

Horwitz, Steven. (2000) *Microfoundations and Macroeconomics: An Austrian Perspective*, London: Routledge.

Kirzner,Israel, M. (1966) *An Essay on Capital*, New York: Sentry Press.

Lachmann, L. M. [1956] (1978) *Capital and its Structure*, California: Institute for Humane

Studies.

Lachmann, L. M. (1947) “Complementarity and Substitution in the Theory of Capital, ” *Economica*, Vol.14, No.54, pp.108-119.

Lewin, Peter. (1999) *Capital in Disequilibrium The role of capital in a changing world*, London: Routledge.

Lewin, Peter. (1994) “Capital theory,” *The Elgar Companion to Austrian Economics*, Edited by Peter J. Boettke, Cheltenhan: Edward Elgar.

Lewin, Peter. (2014) “Hayek and Lachman,” *Elgar Companion to Hayekian Economics*, Edited by Roger W. Garrison・Norman Barry, Cheltenhan: Edward Elgar.

Menger, Carl. (1871) *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*, Vienna: Wilhelm Braumüller.（カール・メンガー　安井琢磨・八木紀一郎訳 (1999)『国民経済学原理』日本経済評論社）

Menger, Carl. [1888] (1935) “Zur Theorie des Kapitals,” Reprinted in F. A. Hayek, ed., *The Collected Works of Carl Menger. Volume Ⅲ*. London:LSE Reprints of Scarce Tracts,pp.133-183.

Mittermaier. K. H. M. (1992) “Ludwig Lachmann(1906-1990): A Biographical Sketch,” *The South African Journal of Economics*, vol60, pp.7-23.

Mises, L. von. (1912) *Theorie des Geldes und der Umlaufsmittel*, München.（ミーゼス・ルードウィッヒ・フォン　東米雄訳（1980）『貨幣及び流通手段の理論』日本経済評論社）

Mises, L. von. (1949) *Human Action: A Treatise on Economics*, New Haven: Yale University Press.（ミーゼス・ルートヴィヒ・フォン　村田稔雄訳（1991）『ヒューマン・アクション』春秋社）

O'Driscoll, Jr. and Rizzo, M. J. (1985) *Austrian economics re-examined: the economics of time and ignorance*, Oxford: Blackwell（ジェラルド・P・オドリスコル Jr.、マリオ・J・リッツォ　橋本努、井上匡子、橋本千津子訳（1999）『時間と無知の経済学』勁草書房）

Powell, Benjamin. (2010) “Some implications of capital heterogeneity, ”*Handbook on Contemporary Austrian Economics*, Edited by Peter J. Boettke, Cheltenhan: Edward Elgar.

Skousen, Mark. (1990) *The Structure of Production: With a New* Introduction, New York:

New York University Press.

Smith, Craig. (2014) “Hayek and spontaneous order.” *Elgar Companion to Hayekian Economics*, Edited by Roger W. Garrison・Norman Barry, Cheltenhan: Edward Elgar.

Strigl, R. von. (2000) *Capital & Production*, Translated from the German by Margaret Rudelich Hoppe and Hans-Hermann Hoppe, Edited with an Introduction by Jörg Guido Hülsmann, Alabama: Mises Institute.

日本語文献

青木幹晴（2012）『自動車工場のすべて』ダイヤモンド社。

赤塚一範（2017）「資本、生産、および景気循環　R. シュトリグル『資本と生産』に関する一考察」『国学院大学経済学研究第48輯』31-72頁。

石塚杉尾（1993）『資本と時間―オーストリア派資本理論の研究』九州大学出版会。

カルロス・ゴーン、フィリップ・リエス（2003）『カルロス・ゴーン経営を語る』日本経済新聞社。

今田治（2016）『入門　生産システム論』ミネルバ書房。

太田正孝・池上重輔（2017）『カルロス・ゴーンの経営論』日本経済新聞出版社。

岡崎陽一（1957）「ラッハマン著資本とその構造」『明治学院論叢44巻第２号』。

尾近裕幸・橋本努編著（2003）『オーストリア学派の経済学～体系的序説～』日本経済評論社。

小田切宏之（2010）『企業経済学 第２版』東洋経済新報社。

小畑次郎（2011）『ヒックスと時間　貨幣・資本理論と歴史理論の総合』慶應義塾大学出版会株式会社。

嶋津格（1985）『自生的秩序―F.A. ハイエクの法理論とその基礎』木鐸社。

下川浩一（2004）『グローバル自動車産業経営史』有斐閣。

清晌一郎（2016）『日本自動車産業グローバル化の新段階と自動車部品・関連中小企業―１次・２次・３次サプライヤー調査の結果と地域別部品関連産業の実態―』社会評論社。

総合技研株式会社（2017）『2017年版次世代自動車における技術革新と部品の変化』総合技研株式会社。

浜田寅彦（1997）「Ludwig M. Lachmann の方法について」大阪市大論集第87号。

藤本隆宏（1997）『生産システムの進化論』有斐閣。

原谷直樹（2004）「急進的主観主義と制度－ルードウィッヒ・ラックマンの経済思想」、一橋大学社会科学古典資料センター年報 , 24：62-76頁。

山中優（2007）『ハイエクの政治思想　市場秩序にひそむ人間の苦悩』勁草書房。

「トヨタの焦燥」（2017）『週刊東洋経済』2017年４月29日－５月６日。

「経営者　豊田章男」（2016）『週刊東洋経済』2016年４月９日。

「三菱に喝！」（2016）『エコノミスト』2016年６月14日。

「自動車産業が壊れる日」（2016）『Wedge』2016年６月。

「揺らぐメガサプライヤー」（2017）『日経 Automotive』2017年10月号日経 BP 会社。

日本経済新聞「エコカー・海外で協業」2016年10月21日朝刊。

日本経済新聞「私の履歴書」2017年１月20日朝刊。

日本経済新聞「東南アで物流を統合」2017年４月25日朝刊。

日本経済新聞「ゴーン氏、タイの工場視察」2017年４月27日朝刊。

日本経済新聞「国内設備投資伸び最高」2017年５月27日朝刊。

日産自動車ホームページ〈http://www.nissan.co.jp/〉2017年９月26日アクセス。

2017年７月４日日産自動車横浜工場見学。